MIKI INTERNATIONAL ASSOCIATION

VOL.43　2011.11　平成23年11月　三木市国際交流協会

三木市国際交流協会15周年記念事業

市民訪問団 姉妹都市バイセリア市でホームステイ

バイセリア市役所で、市長、市議会議員、ホストファミリーと初対面

セコイア国立公園「モロロック」登頂

フェアウェルパーティー

８月２２日～２９日、当協会員１０名（男性１名・女性９名）は姉妹都市であるアメリカ・カリフォルニア州バイセリア市を訪問しました。バイセリア市長ボブ・リンク氏や市議会議員の歓待を受け、教育施設や農場などの見学、また、巨木が空に向かってそびえ立つ国立公園で大自然を満喫しました。そして、ホームステイを通して地元の方々との親睦を深めました。

１４年前に三木市にホームスティした学生のお宅にステイした団員は、再会に感激。また、２００８年、三木を訪問されたバイセリア市の学生とも行動を共にし、さらに絆を強めました。高校生から社会人まで幅広い年齢層のグループならではの情報交換や、世代を超えた温かい交流も生まれ、まるで大家族の旅行のようでした。

■前田節子

三木市とバイセリア市の姉妹都市提携は４５年前、私が高校生のときでした。海外に興味があり、三木市とよく似たバイセリアに機会があれば行きたいと思いましたが、当時の私にとっては、夢のまた夢。しかしその夢がこの夏、ついに実現しました。長年の夢が叶ったということで、ローカル新聞の記者からインタビューを受けるという予期せぬおもしろい体験もできました。

▲リンク市長夫人と

ステイ先は、３人の子どもと母親（父親は出張中）の家族でした。母親は日々の家事、子どもたちの学校への送迎、自身の画家としての創作活動とてんてこ舞いしながらも、私のトツトツとした英語に辛抱強く耳を傾け、私を理解しようとする気遣いに心温まりました。交流の第一歩は、相手への思いやりだと改めて思いました。

■河合理恵

『めちゃくちゃEnjoyable experience！』出発から帰国まであっという間に過ぎ、充実した旅でした。

ホストファミリーは私と同世代の女性２人がホームシェアリングしていて、犬２匹と猫３匹を飼っていました。オリジナルＴシャツのプレゼントにサプライズ！！お土産の、葛飾北斎のタペストリー（葛飾北斎がお好きなので）、風鈴、筆ペンなどを説明しながら渡すと、興味を示し喜んでくれました。２人の名前をひらがなで、私の名前を漢字で書いたりしてとても楽しい時間でした。この旅で一番印象に残った時間です。

▲中学校の音楽のクラスでフレンドリーな生徒と合唱

リンク市長の案内でインターナショナル農業センターを見学

■吉田有梨佐

私にとって、このバイセリア市での異文化交流はとても貴重な経験となりました。

お世話になったホストファミリーとの交流では、英語力が乏しく深い話が出来ずに悶々と悩みました。さらに、日本の地震のことも詳しく教えてと言われました。言葉の壁は確かにあるけれどもホストファミリーは、私をまるで自分の娘のように心配してくれ、人の温かみを感じたホームステイでした。

この機会で感じたことは、語学力の向上とアメリカについてもっと知りたいという気持ちです。またぜひバイセリアに行きたいと思っています。

■辻　恵子

今回の旅は市民訪問団の一員として他人のお宅でお世話になり、英語で交流をするという非常に大胆不敵な冒険でした。

受け入れ先のご夫婦は実に知的で寛容な方で、絵描きの私を何処よりも素敵な町『壁画の町』に案内してくださいました。夢の中を歩いている様でした。“なんと素晴らしい空間がこの町にはあるのか！”今度、ゆっくりと訪ねてみたいと思いました。

リンク市長の運転であちこちの施設を訪問させていただいたのも感激でした。大人の養護学校では、創作活動をしている人たちの表情が輝いていたのが印象に残りました。

■永尾　道子

私の夢でもあった外国でホームステイをすることが現実になり、未熟な英語がどこまで理解してもらえるのか不安でしたが、奥さんと一緒に夕食の準備をしながらの会話や、夕食後、家族と散歩しながらの会話がとても楽しい一時でした。

また、ご主人が病院の事務長で、私も病院勤務の薬剤師として、薬局を見学したいという希望を叶えて頂きました。特に薬剤の過誤防止対策のシステム導入などが参考になりました。

▲ 見学した救急病院の薬局長と主任薬剤師と

▲ セコイアカレッジ夜間クラスで英語を学ぶ
南米から移民してきた人たち

▲ 消防士訓練見学

■吉田恵子

バイセリア市は自然に恵まれ、気候が温暖で農業が栄え、沿道にはオレンジやナッツの木が連なっています。

消防署見学で屋内天井に広がる炎を消火するデモンストレーションを目の当たりにし、まるで映画の『バックドラフト』を見ているような迫力でした。ちなみにバイセリア市の消防自動車は黄色です。

日本に滞在経験のある友達との食事会で、私は現地で調達したお米や食材でバラ寿司やうどん、てんぷらを振舞い、喜んでいただきました。

我が家は２００８年にバイセリア市高校生訪問団員のウアン君をホストし、２００９年、バイセリアの彼の自宅を訪問しました。今回も彼の自宅を訪問し、市外で大学生活を送るウアン君とスカイプで会話をし、彼が楽しく大学生活を送っていることに安心しました。

長野智美

▲ブラボーチーズファームにて、
美味しそうな帽子に満足

今回の訪問は、私にとって初の海外旅行でした。
一番の思い出は、やはりホームステイです。会話もだんだんとわかるようになり、必死に言葉を伝えることも楽しかったです。サンフランシスコでも、バイセリアとは違う雰囲気を味わえて世界の広さを改めて実感しました。訪問団の方々との交流で人脈も広がりました。
今回の訪問で、英語や世界に対する興味がさらに深まりました。また、自分が少しは成長もできたなと感じられる貴重な経験になり、本当に行った甲斐がありました。

丸木愛実

今回の訪問で最も貴重な経験は、ホストファミリーとの生活です。初めて会ったときは緊張して何を話せばいいか全然わかりませんでした。英語にも慣れず、聞き直すことは多々ありましたが、それでもホストファミリーは嫌な顔ひとつせず、ゆっくり言ってくれたり、言い方をかえたりしてくれてすごく安心しました。
スーパーマーケットなどにも連れていってくださり、アメリカの普段の生活にも触れることができました。
この訪問は私にとってとても中身の濃い経験になりましたが、私はまだ英語が十分に話せなくて苦労した点がいくつもあったので、今後、英語の勉強に一生懸命に励みたいと思います。

▲退職後に始めた果樹園で説明を聞く

Warren Gulber　Visalia City Council Member

My family was fortunate to be one of the host families,we hosted Ami Maruki,a 16 year old high school student. She proved to be a perfect match for our two teenage daughters. One evening, Ami, my wife and daughter swam in our pool, and did lap races. Another night we went to watch the Visalia Rawhide baseball team play. She was impressed by how large all the businesses here are.
The week wrapped up Friday night with an all-American barbeque in the Gubler backyard. All ten of the Japanese visitors, along with all the host families, the mayor, the vice-mayor, and other city representatives were in attendance, a total of approximately 60 people. One of the guests, Mr. Tanaka, performed a karate demonstration for us.Then each of the Miki City guests took a turn expressing in good English their appreciation to the city of Visalia and the host families for a wonderful week.
Having lived for two years in Japan and Okinawa as a young man, I am interested in all things Japanese. At one time I was fluent in Japanese, although I do not get much practice using it in California. I was amazed at how much of the language came back to me so that I was able to communicate with Ami and help her with her English in return. She left my wife and I a note thanking us for an unforgettable experience. She indicated that my Japanese helped her in understanding what was going on but that she would buckle down and study hard in Japan so that the next time she visits, she will be able to fluently communicate in our language.

■ウォーレン・ガルバー　バイセリア市議会議員
幸いなことに、我が家も丸木愛実という１６歳の高校生をホストした。彼女は１０代の２人の娘ともすぐ意気投合した。夜には、愛実、私の妻と娘たちは我が家のプールで競泳、バイセリア“ローワイド”野球観戦をした。全てが大きいと彼女は驚いていた。
金曜日には我が家の庭でバーベキューパーティを催した。１０名の訪問団とそのホストファミリー、市長、副市長と市の代表、総勢６０名が出席した。団員の一人、田仲氏が空手を披露した後、それからゲストが順番にバイセリアとホストファミリーのもてなしに対する感謝の意を英語で伝えた。
若い頃、沖縄などで２年間過ごした私は日本について興味がある。一時は日本語を流暢に話したが、カリフォルニアでは使うこともなかった。しかし、驚くことに愛実が英語で困った時に助けられるほどに私の日本語がよみがえってきたのである。私と妻に宛てたメッセージカードには、忘れることの出来ない思い出に対する感謝、私の日本語通訳があったから意思疎通が出来たこと、自分の英語力の乏しさに打ちのめされので、次の訪問では自分の英語力で交流が出来るように帰国後は一生懸命勉強する、と書いてあった。

交流の輪

第１回異文化交流会
「マーブリングを楽しんで」

教育センター大研修室・２０１１年７月１０日

講師／辻　恵子

参加者数：４５名（うち外国人２５名）

日本人も外国人も楽しめる日本的なアート《墨流し（マーブリング）》を体験していただきました。暑中見舞いの時期でしたので、和紙のはがきで親しい方たちにお便りを書く良いきっかけとなりました。

当日、たくさんの準備物を抱えて部屋に入ったとたん、二人の若者に声をかけられました。「何かお手伝いしましょうか？」。とっさに、「ありがとう。では新聞紙をここに敷いて…」など、早速、彼らに作業をお願いしました。すると近くにいた人たちも、当然のように楽しそうに下準備を手伝ってくださいました。後で知ったのですが、彼らは中国の青年でした。あまりに自然に日本語を話されるので、日本人だと思っていました。

水面に流した赤・黄・青などのカラフルな絵の具を和紙に写しとる時の参加者の表情は、言いようもなく楽しそうでした。想像していた以上に美しい大理石模様の作品が出来上がりました。できた作品は、海外の故郷の親しい人たちへ、日本からの優しいメッセージとして届くでしょう！

８月２７日、盆踊り会場で自己紹介をする浴衣姿の協会員たち

（中国・アメリカ・カナダ・オーストラリア・インド）

着付け協力／岩崎和子・ことばの教室日本語ボランティア

交流のきずな

「私はイモ」
～韓国語の先生との再会～

韓国語受講生／宮崎　和歌子

「ことばの教室・韓国語クラス」をきっかけに“千　東園”（チョン・ドンウォン）青年に出会ったのは、５年前のことでした。昼間は関西国際大学の留学生、火曜の夜は韓国語教室の先生でした。

年上の生徒たちの為に大きな身体を屈めながら耳を傾け、その礼儀正しさと誠実さに皆が好感を覚えました。この年に私は父を亡くしたのですが、チョン先生から、「ご愁傷様です。」とメールがありました。その心遣いは今でも忘れることはありません。帰国前に「もう、先生ではないので名前で呼んで下さい。私もイモと呼ばせて下さい。」と言われました。『イモ』というのは、親戚や親しいおばさんの総称です。それ以来、「ドンウォン」「イモ」と呼び合っています。

彼の夢は日本での就職でしたが、４年前、内定取り消しという苦い経験をしました。その後ソウルでＰＣ技術者としてキャリアを重ね、日本企業に再挑戦しました。そして、ついに東京で第一歩を踏み出すことになったのです。上京前に我が家で１０日間程、過ごすことになりました。ちょうどお盆の頃で、初孫を連れて娘一家も帰省し、毎日が宴会でした。語らいの中で、日本人のホスピタリティーを絶賛し、仕事に対する意識の高さにも通じると、彼は日本の良い所を私に再認識させてくれました。

人と人との触れ合いに国境も年齢もありません。心は通うものです。我が家を去る時、彼に合鍵を渡しました。いつでも帰っておいでという気持ちを込めて。その夜、メールには「あの鍵は苦しい時に見て頑張ります。本当に嬉しかったです。」とありました。彼女ができたら、一番に会わせてくれるそうです。その日が楽しみです。

１５周年記念・外国人による日本語スピーチ大会

第二回異文化交流会「にほんごで発表しよう！」

市役所大会議室・２０１１年１０月２３日

中国・台湾・インド・シリア・アメリカの５カ国、計８名の出場者が、来日当時から今日に至るまでの生活の中で、気付いたことや感じたこと、そして、東日本大震災に思うことなどを発表しました。

来日理由は勉強や仕事のため、夫の日本勤務でやむなく、または国際結婚などさまざまです。また、日本語能力検定では１級から３級、既習年数も１年から５年と差がある出場者ですが、堂々とした発表に大きくうなずく観客の姿が見られました。出場者も熱心に学習している“ことば”で、自らの思いを伝えられたということに満足そうな様子でした。

５名の審査員、岩波孝昭・飯島有美子・堀田はるみ・リカルドソウサ・高谷晃平による審査結果、及び発表内容は下記の通りです。

●「言葉を超越した日本美術」**ローレン　ケーシー**（アメリカ）

留学中に出会った金閣寺の美しさに心を打たれました。お気に入りの冨岡鉄斎の絵画には、なぜか懐かしさを感じます。美術からは歴史や文化を学ぶことができるので、もっと精通し、将来、外国人に日本文化を紹介できるようになるのが夢です。

評｜日本人でも発音しにくい単語「びじゅつ」の繰り返しを上手に発音できていました。三木の美術館めぐりはいかがですか。

感動賞

●「懸け橋」**高　剣**（中国）

日本の良さや母国との共通点を知るにつれ、両国の友好関係が発展してほしいと強く思うようになりました。帰国後はここで経験したことを周りの人に伝え、日本からの訪問者を大歓迎いたします。二国間の「懸け橋」になりたいと思います。

評｜お国事情はさておき、人間対人間、顔の見える交流が大事だと思いました。大いに活躍してほしいです。

国際交流賞

●「ワクワク・ドキドキ　三木での生活」**ジャンハビ　デサイ**（インド）

来日当時１歳半だった娘は、母国語より日本語が流暢になりました。学習歴ゼロで、日本についてよく知らなかった私は、言葉や習慣の違いに戸惑いながらも、周りの親切のお陰で次第に生活に慣れ、日本への興味がわいてきました。

評｜異国での生活に戸惑いながらも、子育てに奮闘する姿に感動しました。インドとの相違がよくわかりました。

独創賞

●「支え合おう　日本！」**市川 婷婷**（中国）〈中学生〉

東日本大震災の被災者に何をしたらよいのかを学校で話し合いました。人の立場に立って、その人の気持ちを考えて、言動するのが大事だと思います。

評｜被災者を思う気持ちが良く伝わり、堂々とした気持ちの良い発表でした。

●「私の故郷」**鄭　香蘭**（中国）〈関西国際大学 交換留学生〉

吉林省は美しい自然に囲まれた朝鮮族が中心の町です。隣国の言語や英語・日本語の通訳として活躍する人が多いため観光業が盛んで、外国人観光客には朝鮮人参や黒きくらげが人気です。

評｜日本語が通じる上に、魅力もいっぱいの町に是非、訪れてみたいと思います。

●「子どもために、自分のために、ママはがんばろう！」**市川佳真**（中国）

好奇心旺盛な末の娘の質問に答えるため、また、中学校の先生との懇談が娘の通訳なしで行なえるよう、日本語学習に取り組んでいます。日本語ボランティアになるのが目標です。

評｜言語習得の早い娘さんとの会話が途切れることのないよう、頑張ってほしいです。

●**「発見と驚きの日々」王　勃彰**（台湾）〈関西国際大学 交換留学生〉
東日本大震災直後の来日で、家族も自身も不安いっぱいの船出でした。三木での生活は驚きの連続でしたが、今は交通ルール・ゴミの捨て方など、すっかり慣れました。

評｜異なる文化・習慣に慣れていくうちに、自信をつけてく様子が良く分かりました。

●**「母国・シリアへいらっしゃーい！」ナーイフ　アブドュル**（シリア）
四大文明の発祥地に紀元前に建国され、長い歴史を持つシリア。世界で初めて農業を始め、家畜を飼いました。自身の出身地アレッポ市にある城やオリーブ石鹸はとても有名です。

評｜さすが外国人。アイコンタクト・表情・ジェスチャーなどが非常に上手く、聞きやすかったです。

＊発表内容を収録したDVDがあります。ご興味のある方は、事務局にお問い合わせください。

座談会「地域の人々との交流」～言葉や習慣の違いは、たいしたことじゃない!!!～

司会：倉橋哲雄（「News in English」講師）
話し手：■ジェレミーピショ（フランス・ブルターニュ出身）２００７年来日。兵庫県の国際交流員として勤務。三木市出身の女性と結婚。
■佐野潤貞（韓国・釜山出身）母国で第二外国語として日本語選択。関西国際大学に留学。７年前、来日。日本人の夫との間に２人の子ども。
■栄亜清（中国・吉林省出身）２００１年来日、神戸の大学卒業。２０１０年、三木市に転入。日本語クラスのボランティアとして外国人市民に日本語を教える。

Q. 日本語との出会い

ジ：欧米で大人気の日本アニメでひらがなの美しさや、母国語と全く異なる別世界の魅力に惹かれた。１３歳から独学を始め、大学の日本語学科で日本好き・日本語好きの仲間ができ、世界が広がる。日系企業で通訳を勤めた後、日本で国際交流員の仕事を得た。こよなく兵庫を愛している。
佐：高校での第二外国語・日本語の成績は思わしくなかった。しかし英語が苦手なので、大学では日本語を選択。４年間、文法の勉強をしても話せなかった。１年間の交換留学がきっかけで、ため口ができ、悪口も聞き取れるようになった。
栄：神戸市役所勤務の親戚から日本製品を見せてもらい、興味がわく。吉林省で留学生として選抜され、「あいうえお」から学ぶ。大学３年でアルバイトを始め、会話ができるようになった。

Q. 来日後、気付いたこと

栄：ゴミの分別は慣れるまで面倒だった。三木は神戸より厳しいが、当日に出すなどのルールを守るように会社の研修生にも教えている。
佐：お米がモチモチで美味しい。緑や公園が多いし、市が貸出する自転車は子育てに大いに役立つ。
ジ：良い点は、安全・治安が良い。サービス精神は、ユネスコに登録すべきと思うほど、素晴らしい。
悪い点は、上下関係が厳しい。行動前の準備に手間取る。臨機応変に対応せず、決断に時間がかかる。

Q. 東日本大震災について

ジ：地震の恐ろしさと人間の無力さを感じた。しかし、被災地の人々の取り乱すことなく、困難に立ち向かう姿は印象的だった。日本と海外とのメディアの異なる報道内容に懐疑的。ＴＥＰＣや政治家の対応の悪さが顕著だった。
佐：地震の経験が無く不安だった。子どもの頃から避難訓練をするので、秩序が守られていると思った。
栄：ＴＶ放映された被災地の方々を見て胸が痛んだ。と同時に不屈の精神に感動した。

第二回国際理解講座　「外でもない、中でもない私」

音羽レベッカ　英語講師・画家

教育センター中研修室・２０１１年９月１１日

Introduction

本日のテーマ「外でもない、中でもない私」は、今まで３０年間、日本の社会と関わる「外人」の経験の物語です。学生に始まり、主婦、嫁、母、村の人、そして教師と作家として、頑張ってきました。

１９５５年、アメリカで生まれ、１２歳の時、家族でオーストラリアへ移住し、高校と大学で日本語を勉強しました。卒業後、京都の大学で文部省の奨学生として仏教学の勉強と同時に、裏千家茶道学院の「外国人のためのコース」にも入りました。３年後、修士課程を修了した翌日、付き合っていた日本人の若者と彼の田舎の家にて結納をかわしました。

１９８１年の結婚以来、滋賀県の小さな農村で３５０年も歴史がある家に住み、その地に溶け込もうとしてきました。私の生活は、いわゆる「日本に住んでいる外国人」というより、この国の社会・文化・家庭に深く関わったもので、そういう意味で「外でもない」と言えるのでしょう。しかしながら、あくまでも生まれ育ちは違う国ですので、「中でもない」外人のままでいるのは事実です。

Human Differences and Similarities

原始時代までさかのぼって、２グループの人間を想像してみてください。１つは、草原の種族。遠く地平線に動いているものを確かめるために、鋭い視覚に命がかかっています。他方は森の住民。大樹に囲まれているこの人たちは、小さな変化に敏感です。静かに動いてうまく隠れる才能に命がかかっています。もし、この２グループが、お互いの環境に迷い込むとどうなるでしょう。草原の種族は暗い森の中では視界が悪く不安になり、森の人々は、広すぎる草原で隠れるところがなくて心細い気持ちになるでしょう。

私たち人間は、環境に適応した体と心になります。これは何万年前からの人類の自然な発達です。しかし現在では異なる人々との交流の機会が増えてきたのに、人の心は対応できていません。コミュニケーションが難問です。私の先祖は遊牧民で、祖父母の世代にヨーロッパからアメリカへと移住し、両親も家族を連れてアメリカからオーストラリアへと移住しました。私も同様、１９７８年の来日は単なる冒険として捉え、自分の力でやっていける自信がありました。漢字が書けたら〝かっこいい〟と思い、１２歳で習い始めた日本語にチャレンジし続けました。仏教と茶道で垣間見た興味深い文化に魅了されました。そして生活に慣れてきた自分も、ある意味で魅力的でした。「こんなところで、毎日暮らしているなんて！」

しかし時間が経つにつれ、この森の人々が、私の進入を何となく防いでいるように感じました。近所の子供たちに「外人!」と叫ばれるのは言うまでもなく、知り合いの日本人も何度も同じ質問をし続けました。「日本食、食べられる？」とか「日本語がお上手ですね」など。外人の私は、一生懸命、日本の心に近づこうとしていたので、この“赤ちゃん扱い”が不思議でした。興味深い会話ができないので、退屈になり、ついには短気なりました。外国人の友達も、同じ経験をしていました。周りの人たちはまるで、「外人」という札のついた箱に閉じ込められた私を、箱の窓から覗いているような気がしました。しばらくすると私も諦めて、「外人の役」をするようになったのです。もちろん、私の個性を尊重し、同じ人間として見てくれた日本人の友達もいましたが、７割程は外人の役をしていました。質問には、録音のように応えました。「日本食、食べられる？」「納豆とこんにゃく以外は大丈夫です」「日本語がお上手ですね」「いいえ、とんでもないです」日本への憧れは失望へとなりつつありました。日記に書きました。「私は異なるもの。だから日本を去るしかない。これはよく分かっている」

Invited to Join the "Inside"

ある日の運命的な出会いが私の人生を大きく変えました。ある方の紹介で、私の下宿に神戸日豪協会所属の男子学生が訪れました。当時にしては珍しく、彼はオーストラリアの一人旅の経験があり、「オーストラリア気違い」でした。彼と付き合い始めた私は、やっと日本への真の鍵が渡されたと思い、日記に「音羽の名字をとって普通の日本の主婦になるのが夢だ」と書きました。彼の田舎の家に数人の友達と一緒に招待された時、緑と美しい景色に囲まれた安らぎのある古びた壮厳な

家を目の当たりにして、「ここに住みたい。ここで一生送りたい」と願いました。

その３年後、夢が叶い、結婚の日がやってきました。「ようやく、私は日本の家族の一員になる！」と、緊張と期待でいっぱいでした。実は、彼のお母さんと兄弟は、素性の知れない外人との結婚に反対だったのです。結局、前年に亡くなった義父の臨終の床での一言「まあ、いいんちがう？」が、結婚を許すきっかけだった、というのは後で聞きました。嫁としての初めてのレッスンは、「言われた通りにする」ということ。それまで自立していた私には不慣れでした。

新婚旅行は、私の親戚がいるスコットランドを考えていましたが、義母の一言「息子はまだ学生だから、海外旅行は贅沢すぎる」で、九州にしました。彼は博士課程の最中でしたから、地味な「家庭結婚」で式を挙げました。私の両親を式に招待すると言ったら、義姉のアドバイス「外国人は畳に座れないし、御馳走も食べられないし、世話がかかるからやめよう！」で、日本人の知り合いに「親代わり」として出席してもらいました。自分の結婚式で、自由に決められたのは披露宴のＢＧＭだけでした。あとは衣装から御馳走まで、義母が全部アレンジしてくれました。

My Life as a Japanese Housewife

夫の赴任先アメリカでの２年間の新婚生活を終え、帰国してから「普通の日本の主婦」の特訓が始まりました。それは「みんなと同じにする」こと。私の見かけは外人だから、もともと不可能です。でも、義母は、「日本の主婦はみんなああする、こうする」と一生懸命に説教しました。このレッスンを受けて、学生時代に「外人の役」を演じていた私は、今度は「日本人の役」をするようになりました。「男の子に女仕事をさせたらあかん」と言うので、家事から子育てまでほとんど一人でしました。

一方、愛している主人はほとんど家にいません。仕事場は家から遠いので帰宅も遅く、週末は畑や田んぼの仕事で多忙でした。３歳の息子は「マミー、前に一緒に遊んでくれたおじさんはどこに行った？」と尋ねます。時々、主人ではなくお母さんと結婚しているような気がしました。

時が経つにつれ、苦労して習ったレッスンは、必ずしも本当ではないと気付きました。例えば、「主婦は家をいつもきちんとしている」と習ったけれど、近所の玄関はそうでもありませんでした。この矛盾にあふれている役をさせられる日々に「もういや！」と思ったことがよくありました。そこでこの難局を乗り切るために、今の状況を学生時代に学んだ仏教の「修行」として考えることにしました。辛い時には、「これも勉強だ。」と呟き、やり遂げる力をつけたのです。義母は、漬物から畑仕事、仏壇と神棚の世話、行事の時のおもてなしなど、丁寧に教えてくれました。だから、今になって彼女のきつい言葉「お前は可愛くない」「お前はわがままや」に込められた思い、外人の私を立派な日本の主婦にしたいという意思に感謝しなければなりません。彼女の亡き後も、その教えは今でも役に立っています。

Becoming Myself

こうして、「外でもない私」が育ってきたわけです。家族や家の世話をしながら、気づいたら２０年が経ち、私は子供から大人に成長したのです。もう家を出る夢も見なくなりました。この家は、My Homeになったのです。それと同時に、心の底で「中でもない」と何かが囁いていました。

そこで、自分にとって大事なことを見つけることにしました。「日本人の外国人妻の会」で、関西支部長や雑誌の編集者として活躍することは、義母に尊敬してもらうきっかけでした。そして、英語の教師の仕事で得たお金で自動車を買うなど、出来る事も増え、顔も広くなりました。ボランティア活動、小学生の音楽グループの指導、環境改善のグループのメンバー、町の観光会の手伝いなど精を出しています。個人的な自己表現も豊かになりました。最近は町の祭りのイラスト絵葉書なども描いています。こうして自分の中の「草原の私」も満足できる生活を送っています。２０１０年に５年前から書いていた本が出版されました。この本は、満ち足りた生活、私と家族への感謝の気持ち、そして皆さんに聞いていただきたい私の物語を随筆の形で表現したものです。

今日のタイトル「外でもない、中でもない」ではなく、「外にもいる、中にもいる」というのが、実際の私の状態です。一人の社会人として活躍する私と、自分にとって大事なことにも励んでいる外人の私と、両方が私です。これまでの道のりは長かったですけど、今こうしてここに居ることに満たされた気持ちです。

“ことば”の教室クラス紹介 前半

韓国語入門／講師・佐野潤貞

火曜
夜

亀尾 南保
　私は、学びだして今年で２年目になります。韓国語のことを何も知らなかったため、１年目はついていくだけで必死でした。今では発音や文法が身についていくのを感じています。先生には、優しく教えていただき、とてもお世話になっています。クラスの方々もおもしろく、これからも一緒に楽しく学んでいきたいと思っています。

韓国語初級／講師・金 載勲

火曜
夜

小林 怜子
　先生は、サッカーと韓国語のためなら命もかけるという熱血イケメンで、いつも明るく楽しく、そして厳しく教えてくださいます。受講生は個性的な人が多いので、時々、とんでもない質問や答えが飛び交います。でも、先生は「間違うから覚えられる」と平気な顔で、あの手この手と奥の手を出されます。言葉は難しいですが、日本との文化の比較も分かるので、間違ってもめげずに楽しくやっています。

英会話入門／講師・新田俊子

木曜
朝

山本 由美子
　大人になってからの英会話のレッスンは初めてでしたので、最初は緊張したのですが、音楽を取り入れてのリズミカルなレッスンや、生活に密着した会話などで、すんなり入れました。クラスメイトも気さくな方ばかりで、アットホームな雰囲気でとても楽しんでいます。英語で会話出来ることを目指して頑張っています。

英会話初級／講師・Kerr Kerry Ann

水曜
夜

宮家 史子
　パワフルでノリノリのジャマイカ出身の先生に圧倒されながらも、和気あいあいと学習しています。レッスンはとても丁寧で、難しい言葉も他の易しい表現を交えて説明してくださいますし、内容もゲーム形式、歌、お絵描きと様々で、毎回飽きることがありません。まだまだ自分の言いたいことを十分に伝えることができず、笑ってごまかしつつ？悪戦苦闘していますが、これからも頑張っていきたいと思います。

英語表現活動クラス／講師・河越恭子

金曜
朝

ゲストを囲んで

前田 和子
「英語表現活動」クラス名が去年変わった時、「今度はいったいどんなことをするの？」内気な私はそう思いました。年度末の発表会はお茶目な寸劇に始まり、リレー式の英語落語までさまざま。待っていたのは、即席模倣形式の英語落語、ラジオ局を借りてのお伽話の英語吹き込みとＣＤ製作。どれもビックリな内容でしたが、カチカチに凝り固まった脳が嵐のように活性化するような時間が楽しくて気がつけば１０年近くも在籍しています。

英会話実用クラス／講師・Lauren Casey

月曜
夜

平井 幸代
ニュース、歌、映画の台詞を聞き取ったり、アメリカの休日や行事について教えてもらったりと、バラエティに富んだ授業を楽しんでいます。アメリカ在住経験のクラスメイトがいるので、時々、話の展開に、国内純粋培養の私には「ん？何の話？」ってこともありますが、好奇心旺盛の私にとっては、それもまた面白いです。熱心な先生と博識なクラスメイトに刺激を受けながら、日常生活からのストレス発散ができて、元気になるビタミン剤のようなクラスです。

3月11日　ジョイントミーティングへのご協力よろしくお願いします。

日本語クラス ボランティア支援者

月曜夜

「城下町・篠山ウォーク」

●藤本 宣之

晴天に恵まれた中秋の一日、「日本語教室」の学習者とボランティアは、丹波立杭「陶の里」での“陶芸教室”と“城下町・篠山ウォーク”の旅を満喫しました。

最初の立杭「陶の里」で陶芸の実習では、初めてにも関わらず、花瓶、皿などの個性を活かしたユニークな作品を仕上げました。その後、芝生の上で昼食を取りながら、普段話ができない人同士の会話も弾みました。

次に、篠山市下河原町集会場での講習「狂言の楽しさ」では、面や小道具（扇子や杖）の使い方、装束などについて狂言師から説明を受けました。また、学習者の一人が太郎冠者の衣装を着せていただき、一部を演じました。観客からの拍手喝采に大喜びでした。その後は、篠山城下の散策。旧街道の面影を残す河原町で、妻入商家群の町並みを散策しながら、知識や教養を深め、有意義なひと時を過ごしました。

●市川 婷婷

このバス旅行で一番印象に残ったことは、狂言の説明を受けたことです。狂言の基本的な動き方「ハコビ」では、はじめに上半身を動かし、その後、足がついてくるように移動します。簡単そうに見えましたが、家に帰ってやってみると意外と難しかったです。また、演技の一例として、若い女の人を演じるときは「小面」という面をかぶって、手を出さないように袖の中に隠し、頭をちょっと斜めに傾けると、女の子らしさを出せます。

ニューフェイス

学習者を紹介します

★フィリップ･リュー（写真右）
…イギリス・ロンドン出身、料理上手。
★マシュー･リム（写真左）
…オーストラリア・パース出身、和太鼓特訓中。
★高田委子（写真中央）
…日本語ボランティア４年目。

両人ともＪＥＴのＡＬＴとして来日。日本語教室ではフィリップが先輩ですが、二人とも来年７月の日本語能力検定試験２級合格に向けて、毎週頑張っています。２級ともなると、日本語独特の言い回しが多くボランティアとしては説明に四苦八苦の日々ですが、三人四脚で楽しくやっていこうと思っております。

日本語クラス学習者が優良賞受賞！

快挙！

中国出身の高剣さんが、ＪＩＴＣＯ財団法人国際研修協力機構主催の第１９回「外国人技能実習生・研修生日本語作文コンクール」にて優良賞に選ばれ、１０月７日、東京経団連会館での表彰式に出席しました。全国から３８１４名の応募があり、１００倍の難関をくぐり受賞しました。作文「３年に記憶」はＪＩＴＣＯのホームページでご覧いただけます。

金物まつり「国際交流チャリティーバザー大盛況!!!」

２０１１年１１月５日・６日

213,935円!!!

Thank you for your warm heart.

金物まつり協賛「国際交流チャリティーバザー」には、物品提供や販売のお手伝いなど、いろいろとご協力いただきありがとうございました。
会員の皆様のみならず、ＡＬＴやＫＵＩＳ留学生の若いパワーのお陰で
213,935円の浄財を集めることができました。
すべて国連関係や国境なき医師団、そして東日本大震災の被災地に寄付させていただきます。

豪華出演者のサイン色紙が当たる！

有名外国人落語家　三木に初お目見え！

英語落語寄席

２０１２年２月５日（日）
森林公園・音楽ホール

外国人落語家はもちろん、
流暢な英語を話す日本人落語家の
エンターテイメントに、
おなかの底から笑って寒さをふっ飛ばしましょう！

2011 クリスマスパーティー in MIKI

2011年12月11日(日)13:00～
市役所・みっきいホール

英国人尺八奏者とジャズのセッション！
着物姿の外国人との語らい。
思い思いの衣装に身を包み、
楽しいクリスマスパーティーを過ごしましょう。

国際色豊かなプレゼントが当たる！

●事業予告

1月15日(日)	13：00	教育センター	第三回国際理解講座ＪＩＣＡ出前講座
3月11日(土)	10：00	教育センター	ことばの教室「ジョイントミーティング」

編集あとがき

１５周年の記念事業として姉妹都市を訪問し、友好を深めてまいりました。温かいおもてなしを受け、感激したと同時に今後の交流の意義を再認識しました。また、２回実施した異文化交流会では、国籍を超えた人間関係の構築が見られ、まさにこれこそが“国際交流”であると実感しています。ひとえに会員の皆様のご理解・ご協力があってこそだと、感謝しています。ありがとうございました。

編集・発行　三木市国際交流協会
Miki International Association
〒673-0492　三木市上の丸町10-30　（市民ふれあい部　市民協働課内）
TEL（0794）89-2318
FAX（0794）82-9755
〔E-mail〕kokusai@city.miki.hyogo.jp
〔ホームページ〕http://www.city.miki.hyogo.jp/